

これからの大学運営の基本方針

理事長室から

竹屋 元裕



木下統晴前理事長の任期満了に伴い、6月18日の理事会において理事長に選出され、学長と兼務することになりました。これまで6年間の学長としての経験を活かし、大学運営の安定的発展に向けて尽力したいと思います。

少子化の急激な進行をうけて私立大学の6割近くが定員割れという厳しい状況の中、本学では学部の収容定員充足率は115%と健闘しています。教職員の皆様の努力の賜物です。しかし、全国レベルでは15年後の大学進学者数が現在の75%以下になるという予測があり、学生確保はさらに厳しさを増すものと思います。この様な状況化で、10年後も20年後も選ばれる大学になるためには、「教育の質の向上」と「大学ブランド力の強化」、そしてこれらの基盤となる「安定的な収入確保」が求められます。

新理事長お披露目式で、これからの大学運営の基本方針として、3つの方針と5本柱の重点的取組みについてお話ししました。方針として、「学部の魅力、競争力の向上」、「社会の要請に応えるリカレント教育の積極的な展開」、「大学運営の質・生産性の向上とチャレンジする組織風土の醸成」の3つを掲げました。そしてこれらの方針を実現するため5本柱の重点的取組みを挙げました。これらの取組みを展開することで、「教育の質の向上」、「大学ブランド力の強化」、そして「安定的な収入確保」に繋げていきたいと思っています。皆様のご協力を切にお願いしたいと思います。

「闇夜を歩くときに勇気づけてくれるのは、一緒に歩く友の足音だ」
(ヴァルター・ベンヤミン) ～ 私の思いです。

これからの大学運営の基本方針

～ 3つの方針と5本柱の重点的取組み ～

<方針1>

学部の魅力、競争力の向上

柱1 時代や社会のニーズを捉えた学部教育の再構築

- ▶ 専攻・コースの新設・学科の定員増の検討・実施
- ▶ “キラリと光る教育力”経営改革計画を踏まえた事業展開

柱2 産官学の連携強化による教育・研究の充実

- ▶ 産官学連携を促進・支援を担う「産官学連携センター」の新設
- ▶ 産官学連携の学内外の窓口を事務局内に設置 等

<方針2>

社会の要請に応えるリカレント教育の積極的な展開

柱3 大学院、キャリア教育、通信教育の充実強化

- ▶ 大学院における修士課程の定員増、博士課程の新設
- ▶ 社会人向け資格対策講座「細胞検査士コース」の新設
- ▶ 認定看護師教育課程・特定行為研修課程の定員増
- ▶ 社会人向け通信教育の検討 等

<方針3>

大学運営の質・生産性の向上とチャレンジする組織風土の醸成

柱4 DX(Digital Transformation)の推進

- ▶ DX推進に係る基本方針、実施計画の策定
- ▶ DX推進体制として、DX推進室・DX推進グループの新設

柱5 人事制度・組織体制の新たな構築

- ▶ 教員・職員の意欲向上につながる人事制度への改善 等

気持ち引き締め臨地実習へ

助産別科の「臨地実習適格認定書」授与式が7月25日(金)にありました。竹屋元裕理事長・学長から認定書を受けた21人は、8月からの臨地実習を控え、笑顔の中にも緊張感を漂わせていました。

【5面に記事】

今週の1枚



7月下旬に本学で開かれた国際シンポジウムについて、国際交流委員会の青木学委員長に報告していただきました。

青木学・国際交流委員会委員長

“節目”の年に本学開催／初企画 院生もポスター発表

7月24日（木）、海外の4大学から15名の教員および大学院生をお迎えし、第10回 Allied Health Science Symposium (AHSS) を開催いたしました。本シンポジウムは、国際交流委員会を中心に1年以上にわたり企画・準備を進めてきたものです。

Keynote speechでは、尚絅大学の柳田紀代子教授に、「Kumamon' s Branding Strategy」と題しご講演いただきました。くまモン誕生の背景からプロモーション戦略に至るまで、正に「くまモン学」として多くの学びのある講演に加えて、念願だったくまモンの登場も叶い、聴衆の皆さまを見事サプライズさせることにも成功、くまモン隊にも大いに盛り上げていただきました。良い雰囲気のまま行われたPlenary Sessionでは、各大学の主要な取り組みが共有され、続くBreakout Sessionでは、各教員の専門分野における研究成果が発表され、大変有意義な時間となりました。

また若手研究者にも是非参加して欲しいと考え、今回初めて大学院生によるポスター発表を企画しました。9演題の発表があり、各ポスターボードの前ではとても活発に質疑応答が行われました。参加した大学院生からは、「英語でのプレゼンにとて緊張したが、本当によい経験になった、参加して良かった」という声を聞くことができました。

今回のシンポジウムは記念すべき10回目の節目ということで、企画に多くの時間を費やして来ましたが、その甲斐あって、海外からの参加者もとても満足されており、盛会のうちに幕を閉じることができました。また、本シンポジウムに関するMOU（覚書）も更新され、互いの連携をさらに強固にする貴重な機会となりました。

最後に、本シンポジウムの開催にあたりご参加、ご協力いただいたすべての教職員の皆さまに、心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。



レストラン「ピリア」2階で行われたポスター発表



サプライズで登場したくまモンと記念撮影する参加者たち

私の秘話★ ヒストリー



看護学科 多久島 寛孝 教授

エアチェックの時代

「エアチェック」という言葉を耳にしなくなって久しい。若い世代には、あまり馴染みがないだろう。私たちが高校生や大学生だったころ、レコードは高価だった。レコード店に通い、店員と親しくなって、お気に入りのアーティストの新譜情報を得ては、お金を貯めてLPレコードを買ったものだ。しかし、聴きたいアーティストは一人ではない。でも、気軽にレコードを買うことはできなかった。

そんな時、ラジオ番組、特に高音質のFM放送が私たちの味方になってくれた。そして、それを支えてくれたのがFM情報誌だった。新譜情報だけでなく、いろいろな特集が組まれたりして、次号の発売が待ち遠しかった。

FM情報誌もいくつかあった。「FMレコパル」「週刊FM」「FM Fan」「FM STATION」などである。これらの雑誌から番組情報を得て、放送時間が近づくとワクワクしながらラジカセの前に陣取り、番組が始まると録音して楽しんだ。「エアチェック」の時代である。若い頃のひたむきさと、音楽への情熱がよみがえる、そんな思い出である。

絵本を一緒に見て反応を見る



子どもとのふれあい時間は自然と笑顔に…

言語聴覚学専攻2年次「言語発達学」

触れ合い通じ言葉の発達実感

言語聴覚学専攻2年次生の必須科目「言語発達学」は、子どもの言葉の発達について学ぶ授業です。これまで、年齢ごとにどのように言葉を獲得していくかなど、子どもたちの言語の発達過程について学んできた学生たち。教科書や講義だけではなく、実際に子どもたちと触れ合い、言葉の発達や関わり合い（コミュニケーション）を知るために、先日大学近くの西里保育園と五丁こども園を訪れました。到着と同時に園児たちと遊び始める学生たち。元気いっぱいに体を動かす子もいれば、アリを捕まえて観

察したり、砂でピザ作りをしたりと、パワフルに遊ぶ子どもたちに圧倒されつつも、講義で学んできたことをしっかりと確かめていました。子どもたちは優しいお兄さんお姉さんに大喜びの様子で、「あそぼ～」と手を引かれ、連れまわされている学生も見られました。

言語聴覚学専攻は3年次に実習が控えています。授業担当の松尾朗講師は、「今回の子どもたちとの触れ合った経験を、実習の際にも生かしてほしい」と話していました。

(NL編集部)

看護学科2年次「精神看護学Ⅰ」

全ての人への「心のケア」学ぶ

看護学科2年次生の必須科目「精神看護学Ⅰ」は、世代や病気の有無に関係なく、全ての人に対する「心のケア」を学ぶ授業です。前期の授業で学んだことを踏まえ、7月9日（水）に3407、3408実習室で初めての演習が行われました。

統合失調症の患者との初めての会話を想定。患者は、病気や薬の影響で、だるさを感じているため、配慮をしながら声掛けする必要があります。そうした中、今後の看護計画を立てるために重要となる患者本人の思いや、思い描く今後の生活、今抱える不安などを聞かなくてはなりません。

「ポイントは、『聞き出す』ではなく、話してもいいと思ってもらうようにかかわっていくこと」。授業担当の久松美佐子准教授からのヒントを聞いて、演習がスタート。学生たちは「こんにちは。今お時間よろしいですか?」「きつくはないですか?」「体調はいかがですか?」など、患者役の学生に配慮しながら話かけます。距離を取りながらも明るく接したり、患者のペースに合わせて声をかけたりと、大切なことを話してもらえるように工夫する様子が

見られました。

実践後、学生たちは、それぞれどこが良かったか報告。「親近感を感じられる雰囲気良かった」「相づちの打ち方がいい」「沈黙の時に焦っている様子が伝わった」「一方的にならず患者さんのペースに合わせることが必要」といった気づきを出し合いながら、各自の会話内容や接し方などを検証していました。

(NL編集部)



患者役のクラスメイトを相手に、笑顔で声掛けを試みる

「あきらめずチャレンジ」の心持って

作業療法学専攻 SOアスリート吉田さん講演

7月29日（火）に行われた作業療法学専攻の「応用発達支援作業療法学」（担当：仙波梨沙准教授）で、スペシャルオリンピックス（SO）のアスリート吉田彩さんが、アスリートの思いや挑戦する姿勢について講演しました。多様性について理解を深め、学生たちが「今の自分に出来ること」、「未来の医療専門職として果たすべき役割」について考えてもらおうと実施されました。

吉田さんは幼少期、内向的な性格でなかなか友人ができなかったそうです。しかし、スペシャルオリンピックスに参加したことであくさんの友人に出会うことができたといい、ボウリングやバスケットボールといった様々な競技に挑戦し、大会に出場したことで「自分に自信を持つことができた」と話しました。

講演の終わりには、「スペシャルオリンピックスを通じて、楽しさと仲間を得た。これから自分らしさを出して楽しんでいきたい。皆さんも出来ない諦めず、チャレンジしてください」と学生にエールを送りました。



これまでの経験を交えながら話す吉田さん

講演後、学生から「新しいことに挑戦する時、どのような思いを持って挑んでいるか」と質問されると、吉田さんは「大変だと思うけど、楽しみながらみんなと挑戦出来たらと思い、一歩踏み出している」答えていました。（NL編集部）



学生の手ほどきを受けアジリティトレーニングに取り組む高校生たち（手前）



横になった高校生に体幹トレーニングの指導を行う学生たち

健康・スポーツ
教育研究センター
レポート

熊保スポーツプロジェクト

「アジリティ」テーマに高校生を指導

2025年7月16日（水）、熊本県内の高校生を対象とした本年度2回目の熊保スポーツ・ゼミ（トレーニング研修会）を本学アリーナで開催しました。

スポーツ科学や健康科学に基づく研究と教育を通じて熊本県内でスポーツに取り組む高校生の支援を目的に本年度から始めた「熊保スポーツプロジェクトfor Youth」の一環。様々なトレーニングを部活動や自主練習へ実践的に還元することで、競技力向上や障害予防といった視点から学生アスリートを支援することを目指します。

この日は、センター所属の教員2人（本田啓太講師・宮崎宣丞助教＝いずれも理学療法学専攻）が全体指揮を執り、スポーツリハビリテーションコース所属の2～4年次生32人が学生トレーナーとして、熊本西高校普通科体育コースの1・2年生80人に実技指導を行いました。

2回目となる今回のテーマは俊敏性、機敏性、

巧緻性にかかわる能力である「アジリティ」。前半の座学でアジリティがどのように競技力の向上や障害予防につながるかなど、専門的な知見を学び、後半の実技では、学生の指導を受けながら学んだことを実践し、知識の定着を図りました参加した生徒たちは、専門とする競技が様々で、アジリティに不慣れな人もいましたが、全員が真剣かつ楽しく取り組んでいました。一方、学生たちもトレーナーとして指導や声掛けを積極的に行い、生徒たちが取り組みやすいトレーニング環境を作ることにも努めていました。

本プロジェクトでは、高校生アスリートの身体能力を測定する熊保スポーツラボ（フィットネスチェック）も予定しており、今回の熊保スポーツ・ゼミとの二本柱で展開していきます。

（健康・スポーツ教育研究センター 中村祐貴）

助産別科の21人に「適格認定書」授与式

臨地実習に臨む助産別科の学生に対する「臨地実習適格認定書」の授与式が7月25日（金）に3110講義室Mであり、21人が認定書を受け取りました。

【1面参照】

原田なをみ助産別科長の開式の言葉に続き、竹屋元裕理事長・学長が学生一人ひとりに「頑張ってください」とエールを送りながら認定書を授与。その後、「様々な経験をして、一人前の助産師として活躍できるよう実習を頑張ってもらいたい」と激励の言葉を述べました。

学生誓詞では、別科生たちが作成した動画が流され、誓いの言葉とともに、入学から今日に至るまでの充実感あふれる講義や仲間たちと乗り越えてきた日々が映し出されました。

別科生たちは、8月から3カ月間の臨地実習に入ります。（入試・広報課）



授与式を終え笑顔で記念撮影する助産別科生（後ろ2列）と関係者

インフォメーション

週間行事予定（8月4日～8月25日）	
8/9（土）	からだのふしぎ探検
8/18（月）～9/30（火）	【オンデマンド】保護者会（医検3年、PT2年）
8/9（土）～17（日） 21（木）	夏季休暇
8/24（日）	オープンキャンパス

※次回「週刊NEWSLETTER」297号は8月25日（月）配信予定です。